

林文子先生を偲んで

東市民病院の林先生

大坪 重光

「大坪君」真っ白い、上質紙のような歯をのぞかせて、「〇〇の用件は……」と切り出されるのが常だった。

先生は東市民病院へ昭和47年に赴任された。病院では、放射線科で初めての専門医であり、女性の部長ということで、大きなうねる波のような存在であったことを記憶している。

学問に熱心であった。T社の多軌道断層撮影装置に平行絞り機構を新しく開発し、それまで多かった画像の散乱線は、少なくなり比較にならないくらい解像力がよくなった。特に頭部領域において威力を発揮し、神経の領域、内耳領域、整形外科領域等の診断に大きく寄与した。またよい画像を撮影するための教育の苦勞もたいへんで、特に顔面神経管の時には、撮影の位置合わせ等がうまくいかず林先生は技師諸君に解剖からはじまり、スケッチを一枚一枚作成して立体的に理解させながら、ていねいに指導され、とてもわかりやすい指導であったことを昨日のように記憶している。

先生は公私両面にわたって面倒見のよい人だった。仕事が終わってから、よく食事をしながら、今日の復習をする、また家庭のこと、人生について、昨今の政治について、ロッキード事件のときもやってはいけないことをしたのでこのようになった等々、そんなことが私たちの近くにも些細ではあるが潜めいているときがあるので自分に十分注意していないといけないなど……。細かなことまでよく指導して下さったお陰で問題もなく、これまでやってこれたことを感謝しています。

そんな先生も昭和55年医療短大が設置されて、翌年赴任されると聞いたときは晩秋の空のように、とてもさびしい気持ちでいっぱいであった。

もう一度指導していただきたかった。亡くなられて残念です。

林先生、さようなら。

(名古屋市立東市民病院・放射線科技師長)